冬の日に想う

札幌市医師会
札幌宮の沢病院
笹岡　彰一

凍てつく２月の朝に母を看取ってから、いくつかの年が過ぎました。およそ15年間の母の闘病を通して、医師と患者との関係について考えさせられました。

実家から離れていた私に母から手術を受けたことを知らされて、治らないものと分かりました。札幌の病院を受診してみたらとか、最近はこんな方法があるとかを話しても、母は同じ先生の病院に通い、何度も入院しながら治療を続けていました。その先生は数年おきくらいに近隣の病院を異動されたので、「今度は少し遠くて通うのが大変なの」と聞かされたこともありました。そのうち、長く看病されていた父を看取ると実家は母一人になりました。

数年かけて車の処分や墓終いなどをした頃には、母の病は確実に悪化していました。中心街から橋を渡った住宅地に実家はありましたが、もう無理だとJR駅に近いマンションへの引っ越しを決心し、師走が近づく頃に実家を手放しました。新居は通院や買い物には便利な場所なのと喜んでいたのに、ほとんど外出しなかったようです。そして、新年を過ぎて間もなく緊急入院しました。

私は仕事を終えてから日帰りでJRに乗って病院通いをしました。ある夜、どうしても気がかりになり、ホテルに泊まりました。翌朝早く病院から電話を頂き、看取りの場にいることができました。

病に気づいていた母でしたが、ある事情で治癒できる時期を逃して、長く病気と付き合えればと考えるようにしたようです。主治医への信頼は固く、診断から長年の治療を経て終末期まで診ていただきました。私が札幌の病院になどと言ったことも、そのまま先生に伝えたようです。違う先生の診察なんて微塵も思わなかった母にすれば、私のアドバイスは困らせたのだろうと悔やんでいます。主治医の先生も折に触れて、時間外に私を待って病状説明をしていただきました。翻ってみると、自分も長年治療を続けていた患者さんは多くおりましたが、あくまでも同じ病院に勤務していた期間でした。病院を異動しても同じ先生の診療を望んだ母のように、患者さんに信頼されていたのだろうか、そのような努力をしたのだろうかと考えさせられました。また、長い年月にわたって母に寄り添う診療をしていただけたことは、家族として素直な感謝につながると痛感しました。本当にありがとうございました。

開業14年目

札幌市医師会
しのろファミリークリニック
大西　浩平

私は、38歳で「しのろファミリークリニック」を開業し、開業14年目になりました。

新興住宅地に開業したため、患者層は小児４割、大人６割でしたが、最近は、高齢者の比率が徐々に増加してきています。

ファミリークリニックとして開業した理由は、地方にて赤ちゃんからお年寄りまで、消化器内科以外も幅広く診療してきた経験から自分の長所を生かせると考え選択しました。また、卒業時の進路で内科以外に小児科にも興味があり、大人と子供の両方を診療できる環境を自分で作ることができると考え決めました。

開業当初、保育園児で感冒等にて何度も、母親と一緒に来院されていた子が、医療事務員として当院に勤務されている方もおります。勤務医時代は、２年から３年ごとに転勤していたので、あまり実感しませんでしたが、同じ場所で長く診療していると子供の成長に驚かされます。咳込んでいる小さな背中に聴診器をあてさせてくれた子、診察室で血圧計に興味を持ちカフを触って、毎回、母親に怒られていた落ち着きのなかった子、泣いて診察室になかなか入ろうとしなかった子、歯をくいしばって口を開けようとしない子、予防接種や点滴の時に暴れて皆を困らせた子、喘息発作で頻回に吸入していた子、「痛くするなよ」とにらむ子、爪がピンクで大人びて診察室の丸椅子に足を組んで座り、片手で髪をかき上げてよくしゃべる子、「また、めがねの君か」と言っていやいや診察室に入ってくる子、「またくるね」と言って手を振って機嫌よく帰る子、「しのろファミリーの先生」と言って駆け寄ってくる子たちが、立派に成長されて就職時や受験時の健康診断のために来院されます。また、母親になって赤ちゃんを連れて来られて驚かされたこともありました。

これからも、毎日の診療の中で、子供の成長を見守り診療を続けたいと思います。